

**算数科学習指導案
作成の手引**

第1学年 算数科学習指導案

令和2年11月12日
平和市徳島小学校 第1学年2組 17名
指導者 林 隆策



1 単元名 ひきざん

指導案のページ数については任意。ただし、各項目については、それぞれ詳しく書くこと。*捺印については最後の字の半分位に重ねること。

2 単元について

- * 1 児童のこの学習までに至る学習状況の実態と指導のねらい
- * 2 単元内容の系統（他単元や他学年とのつながり）
- * 3 単元の考察（単元の概要と教材観，単元における学習活動の柱となる数学的活動の概要）
- * 4 本時の考察（本時の概要と教材観，本時の目標に迫るための児童の実態に応じた取り組ませたい数学的活動や本時における目指す児童の姿）

「2 単元について」は、左に示す*1～4の内容を必ず盛り込むこと。

*3, *4の数学的活動については、学習指導要領解説算数編の「各学年の内容」における数学的活動の内容を熟読すること。

3 単元の目標

- （十何）－（1位数）で、繰り下がりのある場合の計算の仕方を理解し計算することができる。
- * 目標は、「おおむね満足できる」状況（B）として設定する。
 - * 学習指導要領に示された教科等目標を確認し，学年の目標を分析した上で，学年別の評価の観点の趣旨を踏まえること。

「3 単元の目標」の文末は，児童を主語として「～できる」と書くこと。「4 単元の評価規準」では，「知識・技能」の文末を「～している」「～できる」として，評価規準を作成すること。また，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」の文末を「～している」として，評価規準を作成すること。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
（十何）－（1位数）で，繰り下がりのあるひき算の計算の仕方を概ね理解し，（十何）－（1位数）で，繰り下がりのあるひき算ができる。	被減数を10といくつに分解して，減加法による繰り下がりの考えを見いだしている。	繰り下がりのある計算に興味をもち，10といくつという数のしくみを用いるよさに気付く身近な問題に用いようとしている。

「5 単元計画」は，「4 単元の評価規準」に則りそれぞれの単位時間で培う資質・能力を明確にすること。

5 単元計画（10時間）

	ねらい・学習活動	評価規準（評価方法）◎は最重点評価項目，○は重点評価項目		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 本時	（十何）－（1位数）で繰り下がりのあるひき算について計算の仕方を見付けることができる。 ・数図ブロックを操作し，計算方法を考える。		◎数図ブロックを10と3にわけて，10のまとまりから9を取るなどして考えている。（活動の様子，ノート）	
2	（十何）－（1位数）で繰り下がりのあるひき算について計算	◎数図ブロックを使って，繰り下がりのあるひき算の計算を		

6 本時の学習

(1) 目標

(十何)－(1位数)で、繰り下がりのあるひき算の計算のしかたを考えることができる。

* 学習目標の裏返しが評価規準である。単元の目標のところでも説明したとおり、目標は「おおむね満足できる」状況(B)として設定する。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」のうち、1つか2つを身に付けさせるような目標にする。

(2) 展開

「学習活動」は4段階で設定する。この文章の主語は「児童」

「教師の支援」の文章の主語は「教師」

学習活動	教師の支援	具体的評価規準 (評価方法)
<p>1 学習のめあてをつかみ、解決方法や結果の見通しをもつ。 かきが13こなっています。9ことると、なんこのりりますか。 13－9のけいさんのしかたをかんがえよう。</p>	<p>・柿の絵を動的に動かす問題場面の可視化を図ることにより、ひき算の場面であることに気付くことができる</p> <p>本時における問題文や図などを記載すること。 また、学習のめあても明記すること。</p>	<p>3 観点の中で本時重点を置いている評価をする。例えば、知識・技能であれば知と記す。あと思、態。</p>
<p>2 各自、数図ブロックを使って、計算の仕方を考える。 ・数え引き ・補加法 ・減減法 ・減加法</p> <p>自力解決の段階において、想定できる児童の考え等をかくこと。</p>	<p>・考えが停滞している児童に対しては数図ブロックでの操作を促し、問題場面や問題状況を把握することができるようにする。 ・ブロックを操作して、様々な方法を考えている児童を積極的に称賛し、多様に考えることができるようにする。 ・減加法で考えている児童の考えを最後に取り上げ、「○○さんの考え方は、9をどこからとっているのか」と同意の発問をすることにより、10のまとまりを意識し、そのまとまりからひくよさに気付くことができるようにする。</p>	<p>思 数図ブロックを10と3に分けて、10のまとまりから9を取っている。(活動の様子、ノート)</p>
<p>3 計算の仕方を発表し、話し合う。 ・自分の考えと違う計算の仕方を知る。 ・10のまとまりからひくと考えやすいことをまとめる。</p>	<p>・減加法で考えている児童の考えを最後に取り上げ、「○○さんの考え方は、9をどこからとっているのか」と同意の発問をすることにより、10のまとまりを意識し、そのまとまりからひくよさに気付くことができるようにする。</p>	<p>本時における授業展開の中での評価する具体的な姿を明記すること。また、単元計画との整合性をもたすこと。</p>
<p>4 評価問題を解き、本時の振り返りをする。 ・評価問題に取り組む。 15－7 ・学習の振り返りを各自ノートに書く。</p>	<p>・評価問題では、ノート上での計算</p> <p>「教師の支援」の書きぶりとして次の文体を参考にするるとよい。 (主語 教師が支援を)することにより、 (主語 児童が)できるようにする。 上記の本文参照。現在では、文末「させる」(使役)は、ほとんど使わない。</p>	<p>思 数図ブロックを10と5にわけて、10のまとまりから7を取っている。(活動の様子、ノート)</p>

(3) 評価する状況と具体的な支援

「十分満足できる」と判断される状況	・繰り下がりのあるひき算について、数図ブロックを意欲的に操作しながら、いくつかの計算の仕方を考えたり、10のまとまりからひいたりすることができる。
「おおむね満足できる」状況を実現するための具体的な支援	・数図ブロックを指導者と共に操作しながら、問題場面の状況を把握できるようにしたり、10と3に分けて10のまとまりからとることを意識できるようにしたりする。

「(3) 評価する状況と具体的な支援」の内容については、抽象的な文章ではなく、本時に想定できる学習活動の場での具体的な姿や、実現できる具体的な指導を、具体的評価規準の数に合わせて明記すること。上記の本文は、具体的評価規準が思の1つのため、それぞれ1つずつの表記。